

## 冬の声

冬こそ 男だ

しんはしっかりと 頑固で

その体は 鉄のようだ

甘さもにがさも いとわない

冬のように 健康な男がいるか？

冬は けっして 病んだりしない

熊のように 寒さを ものともしない

冷たい部屋で 眠るのだ

太田愛人

……

(伊藤紀久代訳)

シュューベルトの『死と乙女』の詩を書いたマティアス・クラウディウスの詩『ストロブのうしろでうたう歌』の冒頭の八行である。南国の冬にはない厳しい北の冬が、きわめて人間的にうたわれている。北国や雪国で育った人なら誰しも共感を抱くような詩である。

日本列島の夏は、どこも暑くて耐えがたいが、冬になると太平洋岸と日本海沿岸とでは大きく違い、また平野部と山地とでも異ってくる。寒さと雪がついてくるからである。昨年の秋、日本海沿岸にある新潟市の私立高校の生徒と共に豪雪地で有名な松之山に行って稲刈りを手伝ってきた。五メートルも積る雪の中で農民はどうして生活しているのか、高校生たちは興味を抱き、さまざまな質問を試みているのが体験学習のための文集にのっていた。

「雪の下で何をしているのですか」

「考えているのさ」生徒たちにとって五メートルの雪の下で「考えている」農民の存在が大変刺激的であったようだ。

外部の者にとって「考え」の内容が気にかゝるらしいが、その内容までは立ちいって質問してはいない。あとは現地を訪ねた者が自分なりに推測すればいいことである。

五メートルには及ばないが「雪五尺」とうたった一茶の里で三年半暮らしたことのある私にとっても、この五メートルの雪の下で考えている生き方からさまざまな示唆を受け

た。

雪の多い冬を越すためには、考えなければ生きていけないのである。暖地の羽根つきや門松風景の冬からは到底想像もできない冬があり、そこではクラウディウスのうたうような男や熊の意志と体力が必要になってくる。冬に考えるところから生活の知恵が産み出され、創造のいとなみがなされてくる。そして人知の及ばないところは自然の作用を学んで生活に豊かさをもたらさねばならない。長い冬をぬきにしては人間の文化は生れてこない。

五メートルの雪の下で大地は休むしかない。しかし、そこで作られる米は、戦後でも有数のうまい米であり、私も稲刈りのあとごちそうになってきた。冬といっても名ばかりの暖地だとれる二毛作の米では、到底うまい米とはいえないのである。生産と休養のリズムは人間だけではなく大地にとっても必要であることを農作業から学んできた。

こうした冬のいとなみを自然から人間に適用して教育の分野に展開した人がいる。日本の社会教育、主として監獄改良、教誨、非行少年教育の先駆者 留岡幸助である。

留岡は明治時代から日本の底辺ともいえるべき北海道の獄舎に進んで教誨師として入り、アメリカで学び、欧州を巡歴した結果、日本の教育に欠けたものとして人格的要素と自然的要素をあげている。この欠点を補うため北海道社名淵に家庭学校を移して教育にうちこんだ。

「冬季に半年休憩した土地は、一陽来復の春に逢ふて播種されると其出来栄えは驚くべき

ものがある。北海道の作物がよく成熟<sup>て</sup>る所以のものは雪のたまものである。今一つは比較的長い冬季（六ヶ月）は地下一尺から二尺まで氷結<sup>こ</sup>るのである。其故冬季は大夏高樓と云はれる程の建物でも、余程基礎を深く掘り下げて堅固にしないと其の家屋が持上げられる恐がある。さやうに北海道の土地は地下の凍るのが強いから、この氷結は自然作用で一二尺は深耕されたも同然である。之が又北海道に農作物が能く出来る所以である。」（原始林の生活・大正十三年）と書いている。

ここに紛うかたなきカルチュアー||文化||農耕の原型が提示されている。留岡はこの冬のもたらす自然的諸要素（ナチュラル・エレメント）こそ人間を育て、錬えることに気付いて、東京策鴨の寮を廃して北海道の原始林の中で新しい教育を展開することになる。

留岡は自然的要素を更に二つに分けて、「人間生活の周囲を包んでいる処の天然自然を全然仇敵と見てしまふ思想」と「天然自然を誠に恵み深い有難い慈父だとする感謝的態度」を指摘している。彼は前者にはジャック・ロンドンや二宮尊徳をあげ、後者に貝原益軒、ラスキン、ベスタロッチー、フレibel、イエスらの自然観をあげている。

冬を考えただけでも仇敵視して生きることとはつらいことであるが、冬に親しむ要素もつてつきあうと多くの賜物が与えられる。人間が耕作し、施肥しなくても、冬の土は寒さのゆえに働き、人間が想像する以上の肥沃な土にして作物を生育させることを体験した留岡は、この辺境の大地こそ人間も作ってくれることに開眼させられたのである。無人の冬のいとなみに着眼した点に改めて教えられることが多い。

自然や季節を失っていく時代に、人間の側にも崩壊現象がおこっていく。留岡が見ぬいたパーソナルなもの、ナチュラルな要因が、知らないうちに排除なされがちな教育の現場で、もう一度、沈黙の冬に身を置いて、冬の声を聴くことが必要になってくる。

私が温暖な地方に移ってみて、冬への対し方がこうも違うのか、と痛感させられたのは、二月に入って太平洋沿岸の地帯でも雪が降る時であった。一夜に三十センチも積ると幼稚園や学校が休みになるのが普通である。私はどうして休みになるのかわからなかった。雪国では一メートル積っても休みになることはない。交通機関が積雪に弱いということばかりではなく、人間の生理機能が雪に対してもろくなっていることに気づいた。園庭や道では雪の処置に困り、一刻も早く雪を消すことに熱中する。これなどは留岡のいう自然を仇敵視する考えにほかならない。雪を天から賜った遊具、恩物とする発想法が生れてこない習慣が、いつの間にか確立してしまっているのである。北国の子供の豊かな雪との遊びは、南国では無視されている。寒い、冷たい、が人間の行動をさえぎるばかりか、考えることすら生み出さないようにしくまれている。

自然を感謝、慈しみ、恩恵と受けとめるところから自然を通して感性が育っていく。積雪による白一色を背景とする世界から逆に色彩への目覚めがおこり、色彩を活かして長い冬に耐える人間らしい生き方に気付かされるのも北国の特有な利点といえるであろう。このような感覚は幼時の頃から自然につちかわれているのである。

雪国の子供たちは雪による日影を黒で描かない。いつも青い影を見ているからである。

緑一色の夏の木立を雑に描く子も、葉を落としたあとの冬の梢を精緻に描くことに努める。冬のほうが樹木にとって本来の姿にもどることをいつしか身につけているからである。

四季の自然の色彩がはっきりしている地方に住む者は、雪のもたらす白が自然の基調をなす色彩であることを知っている。白い冬が毎年、必ず訪れることを知っている者は、冬の白い色を知らずに育った者よりも色彩の豊かさを自然に身につけているはずである。

冬の沈黙は聴覚を錬えてくれる。音を吸収して沈黙の深さを教えてくれるのも五尺の雪、五メートルの積雪である。そこで耳を澄ます者のみが人と自然のふれあう音を聴きわけることができる。冬の朝、目覚めてすぐ、雪が降ったか降らないかを室内のふとんの中で聴きわかるくらいにならないと冬の生活者になれない。なれてくると、戸外の人の話し声や足音が積雪のあるなしで違ってきこえてくるようになる。冬はこうした微妙な聴覚を少しずつ錬えてくれるのである。

詩人の聴覚は、雪の作り出す微妙な音をとらえて作品の中に巧みに用いている。

「堅雪かんこ、しみ雪しんこ」

「小さな雪沓をはいてキックキック、野原に出ました。」

「キシリキシリ雪をふんで白い狐の子が出て来ました」

「キックキックトントンキックトントンと足ぶみをはじめて」

「北風びいびい、かんこかんこ

西風どうどう どっこどっこ」

「雪はチカチカ青く光り」

(宮沢賢治『雪渡り』)

電や北風の中に身をさらした人でなければ、とても書けない冬の声といえよう。沈黙の雪の世界に住んでこのような擬音を詩人は聴いて子供たちに自然の音を情景を伝えようと試みている。厳しい冬はこうした微妙な聴覚を色彩感と共に少しずつ錬えてくれるのである。

冬は物事や感覚の始まりの季節でもある。南国のヴィヴァルディの『四季』は春から始まるが、冬の長い北国ロシアのガラスノフの『四季』は、冬から楽章が始まる。

考えてみれば冬にはマティアス・クラウディウスの描く「冬」のたくましさがある反面、人間の感覚を微妙な色彩や音響に上って目ざめさせる働きをも含んでいるともいえる。ただ、これは言葉や絵本で直接教えることはできない。住んでみて、厳しい冬と共存して初めて気付かされることである。

今でもおそくはない。スキーで雪の中に出かける時、少しでも冬の本質に触れ、沈黙の中に伝えようとしている冬の声を聴きわけてみよう。冬は厳しいが、やさしい教師でもある。

(上星川教会牧師)